

子どものよりよい育ちをともに考える

ベネッセの情報誌

# これからの幼児教育

これからの幼児教育

2011

秋

2011年9月20日発行

発行人 新井健一

編集人 後藤憲子

発行所 株式会社ベネッセホールディングス ベネッセ次世代育成研究所

©Benesse Corporation 2011

## 表紙／裏表紙

東京都 ● 練馬区立光が丘さくら幼稚園

## 『これからの幼児教育』発刊によせて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

## お問い合わせ先

0120-933-964

通話料  
無料

受付時間 10:00～17:00(日曜・祝日は除く)

※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。

※携帯電話・PHSからもご利用できます。

※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、

086-270-5037へおかけください(ただし通話料がかかります)。

第1  
特集

## のめり込める遊びで 幼児の心と体は育つ

インタビュー ● 中村和彦 山梨大学教育人間科学部教授

第2  
特集

## 子どもの育ちを伝える運動会の情報発信

～「結果」よりも「成長プロセス」に注目してもらうために～

データから見る  
幼児教育

園長198名に緊急アンケート

震災後、各園が見直した災害時の対応策とは？

園運営や  
保護者への発信に  
ご活用ください

### 2 第1特集

## のめり込める遊びで 幼児の心と体は育つ

2 インタビュー  
「遊びにのめり込む」中でこそ  
豊富で多様な動きが可能になる  
山梨大学教育人間科学部教授 中村和彦

6 アイディア  
狭いスペースでも気軽にできる  
のめり込める運動遊び

8 体験談&データ  
運動遊びと切り離せない  
「ケガ」について考える

10 学童期の立場より  
成長を見通したかかわりの中で  
ケガをしにくい心と体を育てる  
東京都港区立麻布小学校主幹養護教諭 竹中宏美



### 12 データから見る幼児教育

## 園長198名に緊急アンケート 震災後、各園が見直した 災害時の対応策とは？

15 調査データを踏まえ、園の防災・危機管理について考える  
クライシスマネジメント協議会 長田逸平

### 16 第2特集

## 子どもの育ちを伝える 運動会の情報発信 ～「結果」よりも「成長プロセス」に 注目してもらうために～



### 20 『これからの幼児教育』120%活用のヒント

少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの育成環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家のかたがたに発信し、よりよい子育て環境をつくる一助となることを目指します。

さらには、調査研究ネットワークを海外へも広げ、複眼的、学際的視点から日本の次世代育成を考えていきます。

ベネッセ  
次世代育成研究所  
とは

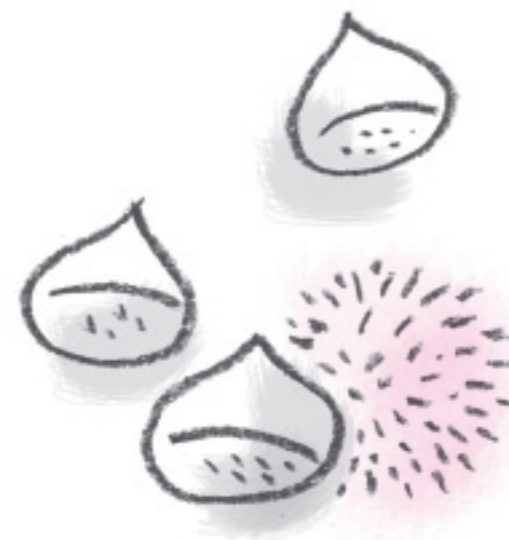


はじめに

暑さも和らぎ、体を動かすのが心地よい季節になりました。園の子どもたちも、きっと元気に遊び、体いっぱい秋を満喫していることでしょう。

幼児期の子どもにとって、運動遊びは成長に欠かせない大切なものです。それは健康な体の発達はもちろん、豊かな心を育むためのものでもあります。「遊び」に、育ちの見通しを踏まえた保育者の関わりと見守りが必要な理由はここにあります。運動遊びを行う際に避けては通れない「ケガ」への対応とあわせて、第1特集のテーマとしました。また、「運動会」を活用した保護者とのコミュニケーションを、第2特集で取り上げました。ともに秋らしく「運動」がキーワードですが、1年を通した園運営のヒントとしてお読みいただければと思います。

また、東日本大震災を受けて、全国の園長先生や保護者に防災に関する意識調査を行いました。防災の秋、園の災害対策を進めるうえでの参考になれば幸いです。



# のめり込める遊びで 幼児の心と体は育つ

運動会シーズンが到来し、園の子どもたちはますます活動的になっています。幼児の成長には、体を動かす時間がとても重要です。心と体を育てる運動遊びについて考えます。

## インタビュー

### 「遊びにのめり込む」中でこそ 豊富で多様な動きが可能になる

近年、子どもたちの体力、運動能力の低下が指摘されています。子どもたちの運動と遊びの環境は、どう変わってきたのでしょうか。幼児期の運動の重要性と運動遊びを行う際に知っておきたいポイントを山梨大学教授の中村先生にうかがいました。

## 運動能力の低下は幼児期から既に始まっている

### 家庭生活での 子どもの動きが減っている

子どもたちの運動能力の低下は、ずいぶん早くから指摘されています。ただ、それが小学生から始まっているものではなく、幼児期から既に始まっているとわかったのは、1980年代半ばになってのことです。そして、運動能力の低下の傾向には、今も歯止めがかかっていません。

走る、跳ぶ、投げるといった基本的な動作の発達を運動能力の一部と解釈すると、今と25年ほど前を比べると、最近の5歳児の運動能力は25年ほど前の3歳児とほぼ同じだということがわかっています（次ページグラフ参照）。そして、今の小学校3、4年生の運動能力は、25年ほど前の5歳児と同じです。

本来、子どもは年齢が上がるにつれて活動範囲も広がり、活動の量も増加します。そうして運動能力も高まっていくのです。しかし、最近の子どもはそうならないのです。

では、なぜ子どもたちの運動能力は低下しているのでしょうか。園のベテランの先生の中には「園での生活や遊びはそんなに変わっていないのに…」と思う方もいらっしゃるでしょう。そうです、原因は園ではありません。

この数十年、子どもたちの生活で劇的に変わったのは、家庭での過ごし方です。住環境の変化から見ても、例えば階段の上がり下り、布団の上げ下ろし、正座といった動きが激減しています。また、ゲーム機が普及する一方で、思う存分外遊びができる場所が地域からなくなるな



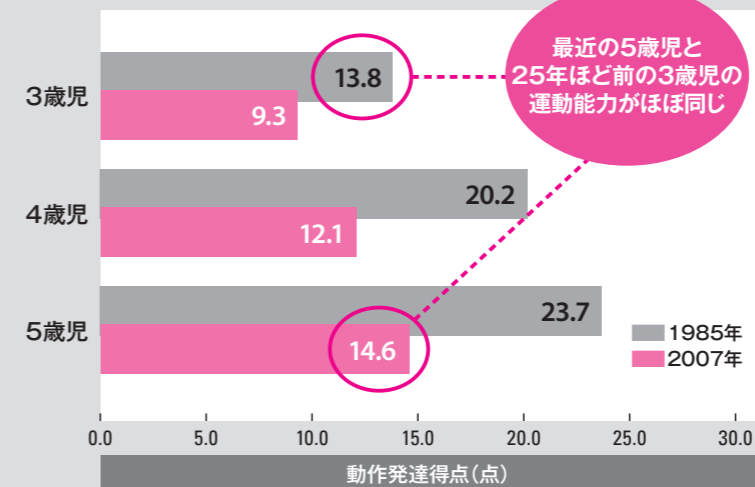
山梨大学教育人間科学部教授  
中村和彦

なかむら・かずひこ

専門は発育発達学、運動発達学、健康教育学。文部科学省中央教育審議会スポーツ・青少年分科会スポーツ振興に関する特別委員会委員などを務める。NHK教育テレビ番組「からだであそぼ」監修。著書に「子どものからだは危ない!」（日本標準）など。

## 子どもの運動能力 最近の5歳児の運動能力は25年ほど前の3歳児とほぼ同じ

### ● 基本的な動作の得点の比較(男児)



中村先生は2007年にある地方都市の公立保育所の3歳～5歳児の基本的な運動動作（走る、跳ぶ、投げるなど7項目）を撮影し、1985年に撮影した同様の記録と比較・評価しました。その結果、2007年の5歳児の基本的な動作は、25年ほど前の3歳児とほぼ同じレベルであることがわかったのです。生涯のうちで最も動作の習得に適した時期である幼児期に、運動能力が十分に伸ばせていない背景には、遊びの質と量の低下があると中村先生は考えています。

※中村先生の調査による

◎調査対象：2007年：地方都市Aの郊外に位置する公立保育所に所属する3～5歳児154人／1985年：地方都市Bの郊外に位置する公立保育所の3～5歳児123人

◎評価方法：走る、跳ぶなどの7項目について1～5点までの5段階の評価を行い、得点を比較。

ど、降園後の遊びの質も大きく変化しました。さらに、転んでケガをすることを「危険なこと」と考え、保護者が子どもの活動を制限していることもあるでしょう。

このような理由で、降園後の生活の中での子どもの動きが貧困化したと考えられます。

### びっくりするような理由で ケガをする子どもも

子どもたちの運動能力が低下したことにより、びっくりするような理由でケガをする子どもたちが増えています。園で毎日子どもたちと

接する保育者のかたがたは、特に実感していることなのではないでしょうか。

例えば、ちょっとした段差からじゃぶじゃぶに飛び降りることができなかつたり、障害物を避けながら走ることができなかったため、骨折のような大ケガをしてしまう子どもがいます。さらに、顔に向かって飛んできたボールを避けられないどころか、目をつぶることもできずにケガをしてしまう子どももいます。

「飛んできたボールが顔にぶつかってしまい、痛い思いをしてしまった。次はちゃんと避けよう」。

幼児期からそんな体験を積み重ねることで、目をつぶったり、顔を背けたりすることを自分の中に自然な動きとして獲得する。それができない子どもがいるのです。

もしかしたら「そんな当たり前のことができないなんて…」と驚くかたもいらっしゃるかもしれませんが、当たり前に思える動きであっても、それを幼児期から生活の中で繰り返し経験しておかなければ、当たり前のものとして本人が身につけることは、実はできないのです。

## 遊びによって心身がバランス良く発達する

### 遊びの中には 多様な動きが満ちている

走る、跳ぶ、投げるといったさまざまな動きを身につけ、運動能力を

高めるのに適した時期は幼児期から小学生の間とされています。特に、幼児期に多様な動きを繰り返し経験しているかどうかは、その後の体の発達に重要な影響を与えます。

幼児期の子どもがさまざまな動きを身につけていくのは、日々の遊びを通してです。遊びの本質を考えれば、遊びを通してこそ、さまざまな動きを身につけ、運動能力を高め

られることがわかります。

子どもたちの遊びを観察すると、走ったり、跳んだり、引っ張ったり、投げたり、立ち止まったり……実にいろいろな動きがあります。しかもそれらの動きが予想できないような順番、ペースで出現します。

遊びをサッカーや野球、水泳のようなスポーツと比べてみればわかりやすいでしょう。スポーツは種目ごとに中心となる動きがあります。しかし、動きの多様さでは、鬼ごっこや缶蹴りに勝てるスポーツはそれほどたくさんはないでしょう。

幼児期はスポーツクラブなどに所属して特定のスポーツに取り組むよりも、遊びを通してさまざまな動きを経験していく方が、運動能力

をバランス良く養えるのです。

### のめり込める遊びを紹介しても遊びの主役はあくまでも子ども

遊びの最大の特徴は、我を忘れてのめり込んでしまう楽しさです。運動能力を高めるうえで、「のめり込む」は重要なキーワードです。のめり込めば、遊びの時間が増えて自然と運動量が多くなりますし、結果的にいろいろな動きを繰り返し経験することができるからです。

子どもたちがのめり込める遊びには、私は三つの要素があると考えています（下記囲み参照）。

まず、その場で勝敗が決まるもの。伝承遊びで言えば鬼ごっこやゴム跳びがそうです。

次に、友だちと合わせて同じ動きをするもの。長縄跳びやまりつきなどがそうです。

そして、普段は感じられない感覚が味わえるもの。高いところからジャンプしたり、すべり降りたりする感覚が子どもは大好きです。

最近の子どもは、遊びの文化にふれる機会が少ないですから、のめり込める要素をもった遊びを、保育者は子どもたちに紹介することが必要です。ただしその際も、できるだけ子どもに任せて、保育者は見守りに徹します。

保育者が「遊ばせる」という気持ちのままでは、子どもは遊びにのめり込むことはできません。事実、遊びに保育者がかかわりすぎる園よ

りも、子どもが主体になって遊ぶ園のほうが運動能力が高いという調査データもあります。「ここまではやってみせるけれど、ここから先は子どもに任せる」という「遊びの教材研究」が欠かせません。

### 遊びから考える力やコミュニケーション力を獲得

遊びは、体だけではなく、心の発達にもよい影響を与えます。例えば、認知する力や社会性などの力は、それ自体が単独で発達していくものではありません。周囲の人々と

のさまざまなかかわりの中で伸びていくものです。遊びの中で子どもは、友だちとのかかわりや行動への自信、さらに学びの意欲などを複合的に体験することができます。幼児教育の5領域のすべてが遊びの中にあるということは、園の先生方ならばよくご存じのはずです。

また、たくさん遊べば、おなかはずり減りますし、たくさん食べれば夜はすぐに眠くなります。遊びを軸にして、生活習慣を整えることもできるのです。



## 外部の専門家に任せきりにしない

### 子どもの専門家としての かかわりが必要

最近、体づくりへの意識の高まりから、スポーツインストラクターなど外部の講師を招き、運動遊びを行う園も増えています。運動遊びをより豊かなものにするための一つの手段ですが、外部の専門家に任せきりで、そこに保育者が積極的にかかわらないのは問題だと思います。

スポーツの専門家であっても幼児期の心と体を正しく理解しているとは限りませんし、子どもとの信頼関係の構築には時間が必要です。自分のことをよく知っている保育者が一緒だから、子どもは安心して運動遊びを楽しめるのです。外部の専門家を招いている場合も、園の先生が主導権をもって計画を立て、その年齢の子どもの状況を外部講師に説明することで、園全体として遊

びへの考え方を統一していきたいものです。そうでないと、せっかくの取り組みも子どもの生活に根ざしたものにならず、子どもの育ちを阻害してしまうおそれもあります。

子どもの学力に対する関心に比べると、運動能力に対する関心はまだまだ低く、また誤解も多いように思います。「うちはスイミングクラブに通っているから大丈夫」と考え

ている保護者には、ひとつのスポーツだけで運動能力が身につくものではないこと、遊びの中でこそ多様な運動能力が養われることを伝えていただきたいと思います。運動会などのイベントや園だよりを通して、子どもの心と体の育ちの仕組みと、そこでの遊びの重要性を園が発信することで、大人の意識も変わっていくのだと思います。

### 現場の みなさんへ

園の先生の中には、ご自分が運動が苦手で、園での運動遊びにも不安を抱いているかたがいらっしゃるかもしれません。確かに外部の専門家は運動のことはよく知っているでしょう。しかし、子どもの育ちのことを一番よく知っているのは保育者です。運動がじょうずでなくても構いません。どうか自信をもって、子どもたちとの遊びを楽しみ、体を動かしていただきたいです。歌やお絵かき同様、子どもたちは運動遊びも大好きな園の先生と一緒に楽しみたいと思っているのですから。

### 中村先生が考える 幼児期に合った遊び

のめり込むことでいろいろな動きが経験でき、自然と運動量も増えるもの

では、どんな遊びの要素があると子どもはのめり込むのか

- 1 勝敗・順位**  
 その場で勝敗や成否、順位がはっきりするもの  
 (例：鬼ごっこ、ゴム跳び)
 
- 2 協同性**  
 友だちといっしょに力を合わせてできるもの  
 (例：長縄跳び、まりつき)
 
- 3 非日常の感覚**  
 普段の生活では感じられない感覚を体験できる  
 (例：高いところからの跳躍、すべり降り)
 

▶▶▶ 中村先生の仮説を踏まえた遊びの例は、P6でご紹介します

アイデア

# 狭いスペースでも気軽にできる のめり込める運動遊び

広いスペースがなくても気軽に組み組める運動遊びの例を中村先生が紹介します。遊び方をある程度示したら、あとは子どもたちに任せることが大切です。子どもたちの創意工夫で遊びが変化していく様子を楽しみましょう。

★最初はなかなかじょうずにできないけれど、繰り返し取り組む中で だんだん上手になっていく遊びであることも、「のめり込む」ための要素です！

## 1 ボールをドリブルしながら入れ替わろう！

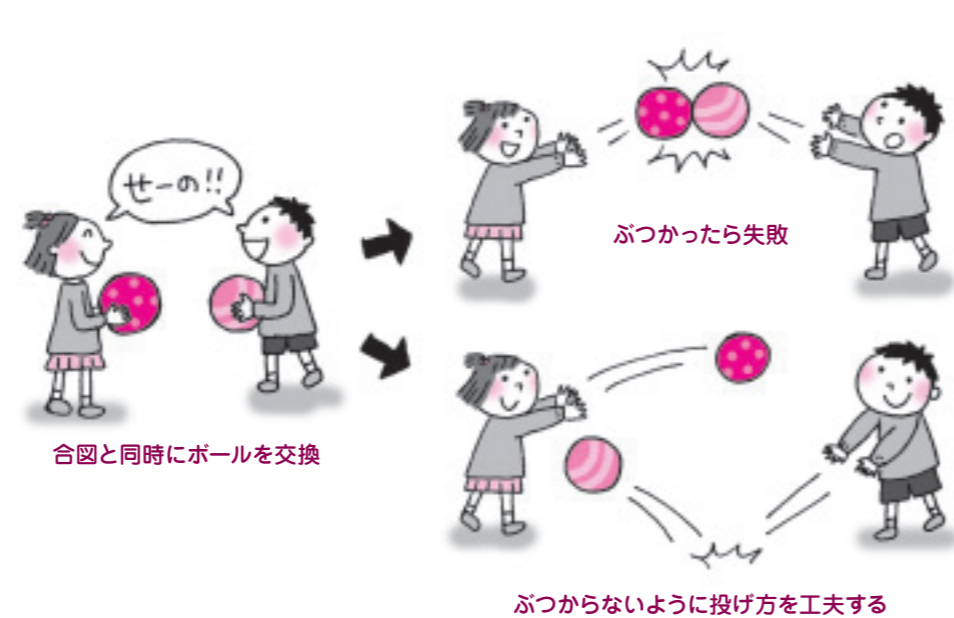


ボールをドリブルして      ボールが宙に浮いている間に      二人が入れ替わる

一人1個ずつボールを用意。最初は二人一組からチャレンジ。調子を合わせながらドリブルをし、「せーの」の合図（保育者でも子どもでもよい）でボールが宙にある間に入れ替わる。最初は全くできない子どももいるが、みんなと一緒に楽しむうちに次第にコツがつかめてくる。  
【できるようになったら】人数を増やしたり、入れ替わるタイミングを早めたりすることでさらに盛り上がる。

## 2 同時にパスをしてキャッチボール！

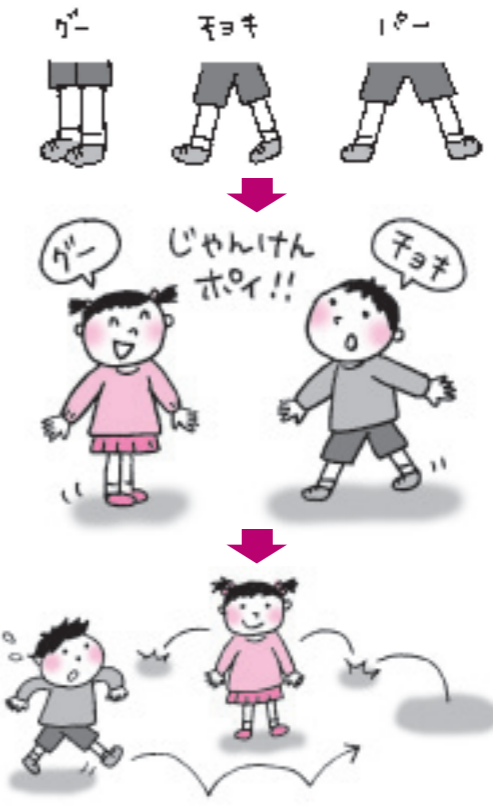
二人一組で2個のボールを用意。それぞれボールを持ち、相手にパスをする（ボールを入れ替えていく）。ボールが衝突しないように気をつけながら、相手がキャッチしやすいパスをしていく。  
【できるようになったら】1人がノーバウンドでパスするときは、もう1人はワンバウンドでパスするなど、保育者が近くでパスのバリエーションを試演して、遊びの幅を広げていく。



合図と同時にボールを交換      ぶつからないように投げ方を工夫する

## 3 罰ゲーム付き両足じゃんけん

両足で「グー」「チョキ」「パー」を出す。「最初はグー、じゃんけん（ここでジャンプ）、ポイ！」で勝負する。負けた方は自分が出した足じゃんけんの形のままで相手のまわりを一周する。



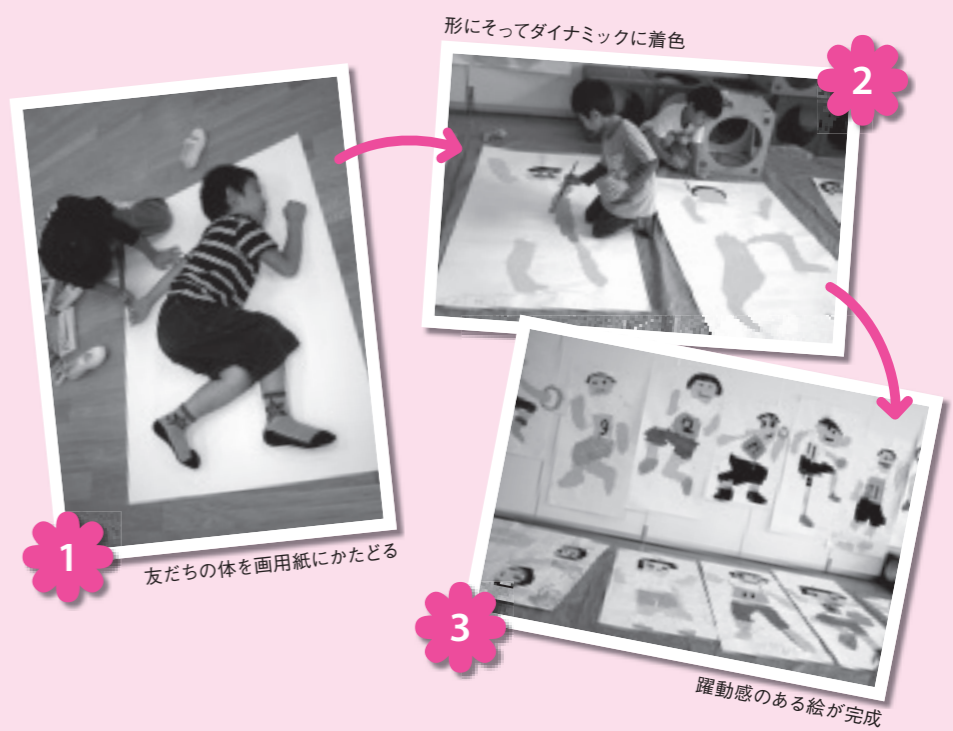
### のめり込むための もう一つのポイント

遊びにのめり込むためのポイントを「勝敗・順位」「協同性」「非日常の感覚」とご説明しましたが、これに加えてもう一つ、大切なことがあります。それは「可変・柔軟性」です。子どもたちがルールを自由に変えられる、そして飽きたらやめられる、ということです。遊びが訓練やトレーニングと違うのは、子どもたちが主導権をもち、自由に、好きなようにのめり込めることです。遊びの中で発生したトラブルも、子どもたち自身で解決する。遊びは運動能力だけでなく、コミュニケーション力を学ぶ場でもあるのです。（中村先生）

### のめり込んだ経験を 生かした 取り組み例

### 遊びにのめり込むことで創造する心が刺激されます

運動遊びにのめり込み、心から楽しんだ経験は、子どもたちの心にしっかりと刻み込まれます。このような経験は、描画などの創作活動に発展させていくこともできます。東京都練馬区立光が丘さくら幼稚園では、年長児が運動会の様子を絵にしました。大きな紙の上で寝転んだ友だちのポーズをかたどりながら、躍動感のある絵を描きました。体を思い切り動かしたときの感動を利用した、まさに全身をつかった描画を子どもたちは楽しんでいました。



1 友だちの体を画用紙にかたどる

3 躍動感のある絵が完成

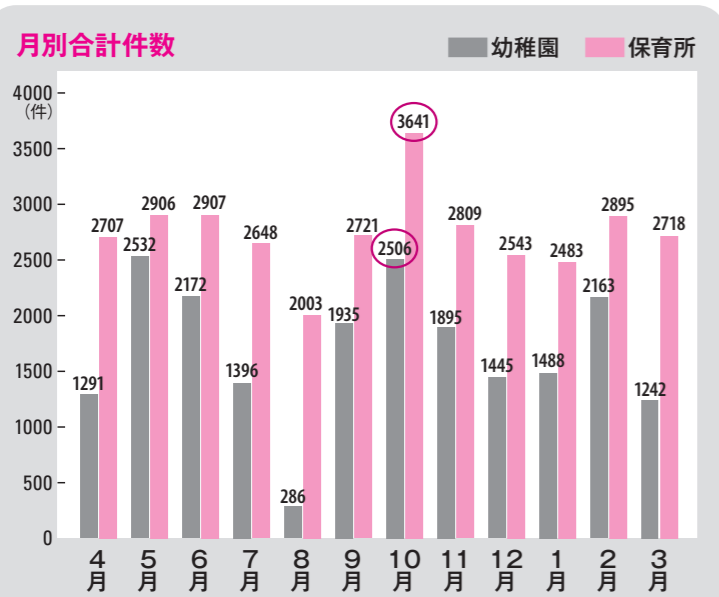
体験談 & データ

# 運動遊びと切り離せない「ケガ」について考える

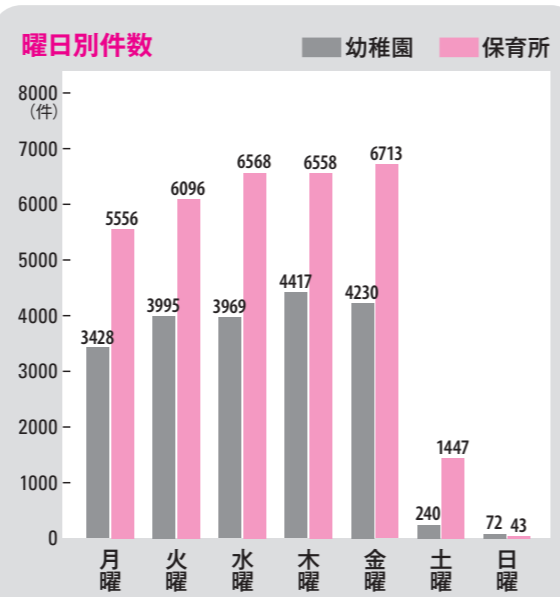
子どもたちが運動遊びにのめり込むほど、園として心配になるのはケガです。ここでは独立行政法人日本スポーツ振興センターによるケガの発生件数データと、本誌読者アンケートでお聞きした全国の園でのケガ対応の一部をご紹介します。

## 1 全国の幼稚園・保育所における園児のケガの発生件数

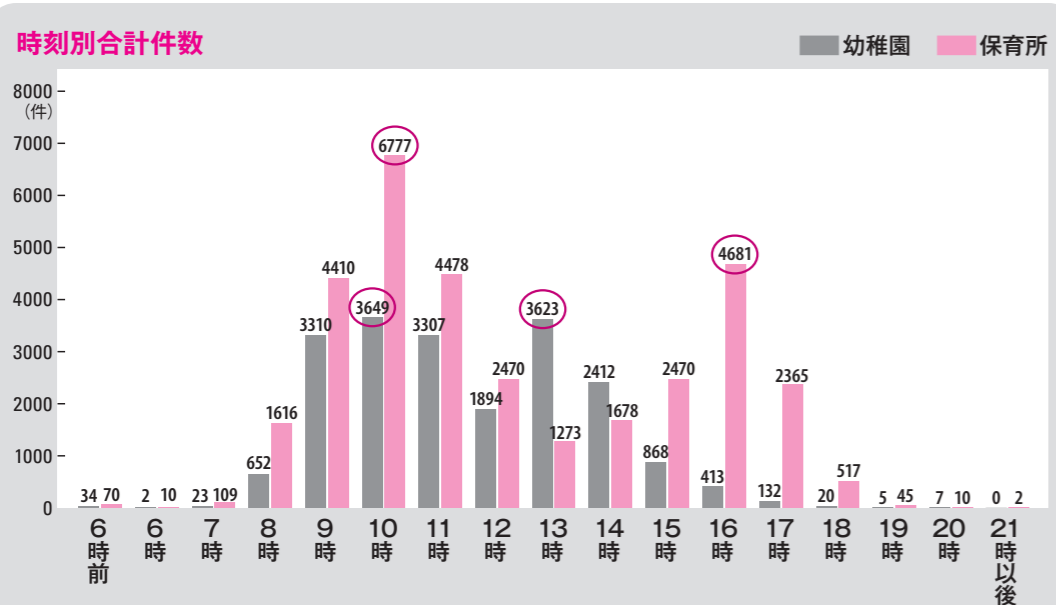
### ●10月はケガの発生が多い



### ●月曜日から徐々にケガの発生数が増加



### ●幼稚園は10時と13時、保育所は10時と16時にケガが発生する件数が多い



出典/独立行政法人日本スポーツ振興センター「学校の管理下の災害—23—基本統計—」(平成23年)より

## 2 「子どものケガ」について、保護者に普段から伝えていることや心がけていること—全国の園長先生の体験談(抜粋)

### 園のケガ対応について知らせる

ほけんだよりなどで、ケガを防止するための園での配慮や、ケガが起こったときの対応の仕方などをお知らせしています。また、ケガが起きた際の連絡先などを入園時に記入してもらっています。(石川県/私立保育園)

ケガを防止するために体力づくりにも力を入れており、家庭でもできる運動を知らせています。(奈良県/公立幼稚園)

### 成長・発達にとってのケガの意味を伝える

子どもは、小さなケガや小さなけんかをくり返しながら自分で気をつける心や自制心、友だちと過ごすための術を学んでいくことを折にふれて伝えています。(東京都/私立幼稚園)

ケガをした時の状況をきちんと伝えていきます。ケガにつながる行動の背景や今育っている力(友だちとのかわり、年長児へのあこがれ、運動への意欲)などを説明しています。(岐阜県/私立幼稚園)

### 保護者への報告・対応を丁寧に行う

ケガについての連絡は園からも報告しますが、園で気づかなかった分は、どんなに小さくても必ず家庭から園に連絡をいただくようお願いしています。(新潟県/私立幼稚園)

どんなにささいなケガ(すり傷、きり傷)でも、必ず保護者に伝えるようにしています。それをする以前と以後では、保護者からの苦情も減り、信頼もあつくなりました。(新潟県/私立幼稚園)

小さな傷でも保護者の方に連絡をし、1日様子を見て頂くようにし

ています。翌日の登園時にも「昨日はあれから大丈夫でした?」と声をかけるように心掛けています。(千葉県/私立幼稚園)

### 職員間で対策などを共有する

禁止ばかりではいけないとは思っていますが、園内で防げる事故については、職員が共通理解のもと防止に取り組んでいます。ヒヤリハットの事例を出し合って危険な場所を確認し、適切な対処の仕方を身につけるようにしています。(滋賀県/公立保育園)

ヒヤリハットやアクシデント表をつけ職員間で共有し、事故発生後の検証は職員全員で行っています。そして、再発防止策を保護者に口頭または文書でお伝えしています。(長野県/公立保育園)

データと園のケガ対応を見て思ったこと

### 子どもにとってのケガの意味を保護者に伝えることも大切

山梨大学教育人間科学部教授 中村和彦

ケガの発生状況に関するデータを見ると、やはり子どもが活発に活動している時期、時間帯にケガが多くなる傾向があることがわかります。10月は運動会が多い時期ですし、午前中の外遊びの時間もやはりケガが起こりやすい。運動や遊びにはケガにつきものということは、現場の先生方は普段から実感されていることだと思います。

では、ケガを防ぐために、活動を制限させるのか。それに賛成する方はあまりいらっしゃらないでしょう。なぜなら、園のケガ対応に関する体験談にもあるように、子どもたちはたくさん活動して小さなケガをいろいろと経験することで、大きなケガを防ぐ力を身につけているからです。痛い経験をするから、「痛くないようにするには今度はどうすればいいか」

を考えるのです。

ですから、園内の安全点検やケガが起こりやすい状況に関して職員間で意識共有を行った上で、「子どもはケガをしながら多様な動きを身につけていくものだ」ということを、園が保護者にきちんと説明することが大切だと私は思います。実際、アンケートでも保護者への情報発信を大切にしている園が多いことがわかります。幼児期に全身を使って元気に遊ぶことは、体と心の発達に大切であり、小さなケガは大きなケガを防ぐ素地となることを、入園時から折にふれて伝えることが大切だと思います。



学童期の 立場より

## 成長を見通したかかわりの中で ケガをしにくい心と体を育てる

園を巣立った子どもたちを迎える小学校では、ケガの問題をどのようにとらえているのでしょうか。学童期の立場から「ケガをしにくい心と体」を育てるために求められるものは何かをお話いただきました。

東京都 港区立麻布小学校 **竹中宏美** (主幹養護教諭)

### 豊かに遊び、保護者が子どもの体を知ることによってケガをしにくくなる



#### 体を守るのが へたになっている

小学生のケガで多いのは、擦り傷、切り傷、打撲、そしてねんざです。これは昔も今も同じです。しかし、最近変わってきたのは、上半身のケガが多くなっていることです。特に顔のケガが増えているように感じます。転んで鼻をすりむいたり、歯をぶつけてしまったり……いざというときに手が出ずに、体を守ることができないのです。

件数は多くはありませんが、骨折に至るケガもときどき発生します。そして、同じ骨折でも近年は重症化

するケースが多いのです。例えば、転んで手首をついて骨折してしまう、それもひどいときには両手首とも骨折するようなケースが見られるようになりました。

ケガが発生しやすい時間帯で気になるのは、登校中です。つまずいて転んでしまい、ランドセルを背負ったまま保健室を訪れる子どもが最近目立ちます。

休み時間や体育の授業は体を動かす分、ケガが発生しやすいのですが、本人にそのときの状況を聞いてみると、そんなに激しく動いているわけでもないのにケガをしてしまうことが少なくありません。また、

興奮していたわけではないのに相手に対する力加減がわからず傷つけてしまう例もあります。遊びの経験が少ないのか、相手との距離感や力加減がわからないようです。

#### ケガしやすい子どもには 特徴がある

ケガをする子どもたちを見ると、もちろん全員ではありませんが、普段から気持ちが不安定な子、整理整頓が苦手な子が多いような気がします。自分の行動の結果を想像し、考えながら行動することが苦手だったり、例えば洋服をたたむなど、手指を使ったいろんな動きが日



写真/東京都港区立麻布幼稚園



常生活に乏しいことが原因にあるように私は感じています。

私たちの生活様式は、近年大きく変化しています。便利さと引き換えに、生活の中でいろいろな動きを経験する機会を失いました。最近の子どもが階段の上がり下りがへたで、平地でも転びやすいのには、畳の生活が減り、立ったり座ったりを繰り返すことが少なくなったことも影響しているかもしれません。はっきりした調査データはまだありませんが、子どもたちの様子を日々目にしていると私はそう思うのです。

子どもたちをケガから守るために、小学校では、家庭への働きかけも行っています。ツメをきちんと切って相手にケガをさせないようにする。髪の毛も視野を邪魔しないよう整える。そして睡眠をたっぷりとる、などです。校内では縄跳びやマラソンなどを取り入れた体力づくりを奨励し、休み時間にはできるだけ外遊びをするように声をか

けています。たくさん体を動かすことで、ケガをしにくい身のこなしが身につきます。

#### 心と体のバランスの良い成長が ケガを防ぐ

発達の過程から言えば、幼児期の経験はさらに重要です。いろいろな遊具を使いこなし、どんどん遊ぶことでケガをしにくい体に育ちます。園の先生方もそのようなお考えで、日々子どもたちと接していることだと思います。

私は、子どもの遊びに保護者がかわっていくことも重要だと考えています。子どもと日々継続的に遊ぶことで、子どもの体を知ることができます。そして我が子は今、どんな動きができて何ができないのかが分かってくるはずですから。そうすれば、子どもがケガをしたときも、一緒に遊んでいた友だちや環境に原因を求めるのではなく、我が子の成長の一場面での出来事として捉え、

子どもとのかかわりや生活習慣などを見直すことができるでしょう。

ケガを防ぐためには身体機能の向上だけでなく、心と体のバランスも大切です。廊下や階段で思い切り駆け出したいと思ったときも、周囲のことを考えて我慢する心があればケガは減ります。そして、自分の感情をコントロールする練習は、友だちとのいろいろな遊びを通してたくさん経験できるでしょう。

子どもたちは体を動かすことが大好きです。子どものケガをゼロにすることは不可能です。けれど、ケガの頻度を少なくしたり、程度を軽くしたりすることはできると思います。ケガを恐れて子どもを部屋に閉じ込めるのではなく、子どもの体の成長を見通しながら、遊びの中で心と体を豊かに育てていきたいと思っています。

園長198名に  
緊急アンケート

# 震災後、各園が見直した 災害時の対応策とは？

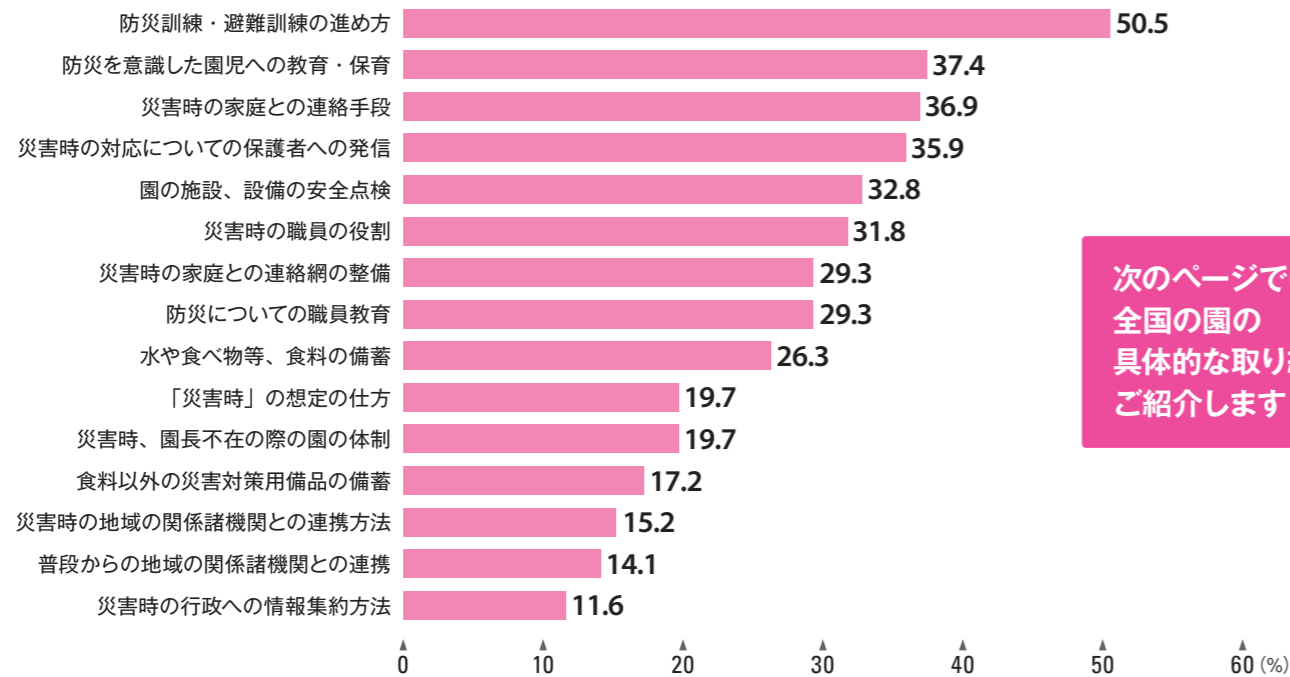
ベネッセ次世代育成研究所は、2011年5月末、全国の幼稚園・保育所・認定こども園の園長先生を対象に、園の災害時の対応策についてアンケートを行いました。また、同時期に0～5歳児をもつ3,096名の母親に「震災による子育てへの影響」についての調査も行っています。園の災害時の対応策を考える材料のひとつとして、ぜひご活用ください。

**引用・転載時のお願い** 本調査の結果を引用される際には、該当のデータの調査名称を記載してください（例：ベネッセ次世代育成研究所「『これからの幼児教育 2011年夏号』読者アンケート（2011）」）。

## 見直したのは「訓練の進め方」や 「防災を意識した保育」「家庭との連絡手段」

**Q** 東日本大震災後、災害時の備えとして、見直したり、新たに加えたものはありますか。

**図1** 震災後、災害時の備えとして見直したり、新たに加えたもの



注1:複数回答。 注2:「無答不明」「その他」は除外。

★震災後、災害時の備えとして見直した項目や新たに追加した項目について園長先生等に聞きました。最も高かったのは「訓練の進め方」で約5割の園が選択しています。3割以上の園が「防災を意識した保育」や「保護者との連絡手段や発信」、「園の安全点検」や「職員の役割」を挙げています。なお、

同じアンケート項目を使って「災害時の備えとして知りたいこと」を聞いたところ、「備蓄」について知りたいという声が高く、今後、園としての対応が必要だと考えている園長先生が多いことがわかりました。

次のページでは  
全国の園の  
具体的な取り組みを  
ご紹介します

## 全国の園で行われている 防災の取り組み例の一部をご紹介します

見直したり、付け加えたりしたこと（図1の設定に対する自由回答の中から一部を抜粋）

### 訓練を見直したり、想定ケースを追加した

**同一建物にある区民ひろばとの合同避難訓練を実施しました。**（東京都／公立幼稚園）  
災害時は携帯電話などが使えなくなるので「園児は職員がまた、園から連絡ができない場合の園 しっかり守って避難するので、まずは 園の第1次避難先を周知し、保護者の 保護者自身が安全な所に避難してほしい」旨を改めて伝えました。そのうえで、引き取り訓練の回数を増やしました。（東京都／公立幼稚園）  
**園のどの場所が安全か危険かを再度確認し、園外保育の場合には、あらかじめ避難経路などを見直すことを徹底しています。**（三重県／私立保育園）

### 地域との連携を強化した

**地域と炊き出しの練習をいっしょに行うなどして連携を強化していくつもりです。**また、避難方法などを子どもが理解しやすいように、園で「大地震がおこったら」の絵本を作成しようと思っています。（奈良県／公立幼稚園）  
**地域の防災防犯協議会と連携し、園内の安全点検の項目を増やしたり、防災訓練の進め方を再確認し定期的にシミュレーションするようにしました。**（奈良県／公立幼稚園）  
**併設の小学校にも協力をおぎ、合同の避難訓練を年3回行うこととなりました。**避難経路の再検討や、よりスムーズに情報が伝わるよう連絡網づくりを行っています。（静岡県／公立幼稚園）

### 備蓄品の内容や量を見直した

**食材（米、みそ、乾めん等）の備蓄を行いました。また、紙オムツ、おしりふきの備蓄量を確認し、さらし（おんぶひも）を追加発注しました。**（東京都／公立保育園）  
**簡易トイレ用に、ベットのトイレ用の砂を購入しました。固めて、家庭ゴミとして処理が出来ますし、紙製の流せるタイプのものであれば、下水道が復旧したあと、トイレに流すこともできます。**（東京都／私立幼稚園）

### 家庭との連絡方法を見直した

**停電に備え、電話はアナログ回線を導入。また、メール配信システムを整備し、ツイッターのアカウントも取得しました。**（愛媛県／私立幼稚園）  
**園のパソコンから保護者の携帯電話に一齐にメールを送れるシステムを導入しました。**（東京都／公立保育園）

### 園の安全対策を進めた

**今年度は毎月、いろいろな形で訓練を行い、いつも安全に行動できるようにしていきたいと思っています。**すべての窓ガラスに飛散防止の防災フィルムをはるなど、具体的な対策も進めています。（埼玉県／私立幼稚園）

### 行政との連絡体制を整備

**市の災害対策本部と園長を直接結ぶホットラインが開設されました。**また、なるべく外遊びを増やし、遊びの中で避難訓練に生かせるような活動を自然に取り入れようとしています。（沖縄県／私立保育園）

出典（12、13ページ）：『これからの幼児教育』2011年夏号 読者アンケート

調査テーマ：東日本大震災を受けて、各園で見直した災害時の対応策とその内容。  
調査対象：幼稚園・保育所・認定こども園の園長 198名  
調査地域：全国

調査時期：2011年5月30日～6月17日  
調査方法：『これからの幼児教育』2011年夏号を郵送した際に自記式アンケートを同封し、FAXで回収した。

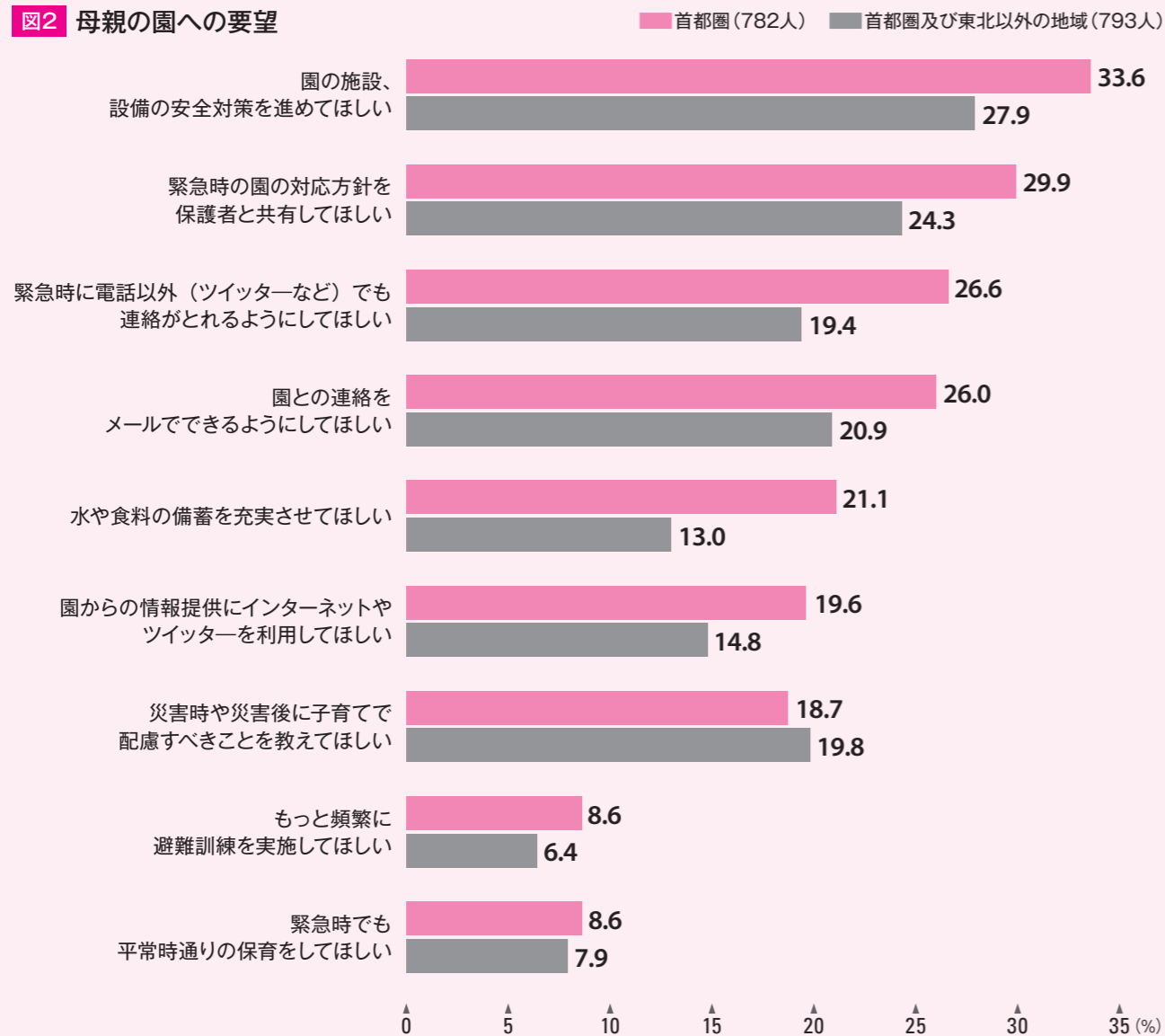


母親  
3,096名  
アンケート

## 保護者が園に求める対策は「設備の安全対策」や「緊急時の連絡や対応」

**Q** お子さまが現在通っている幼稚園・保育園・その他の園・施設について、あなたは次のことをどう思いますか。

図2 母親の園への要望



注1:「とてもそう思う」の%。注2:全20項目のうち、緊急時や災害時の対応に関連する9項目のみ図示。注3:子どもを園に通わせている母親のみ回答。

★0～5歳児をもつ母親を対象に園への要望を聞きまし。首都圏と、首都圏及び東北以外の地域で園への要望を比較したところ、「設備の安全対策」や「緊急時の連絡や対応」、「水や食料の備蓄」などで、首都圏の要望が特に高いことがわかりま

した。首都圏の上位5項目についてはそれ以外の地域と比較すると、5ポイント以上の差がみられ、震災の影響により、特に首都圏の保護者の緊急時の対策への意識が高まっているよう

出典:3.11 東日本大震災の影響 子育て調査

調査テーマ:東日本大震災後のお子さまの生活や様子、母親の子育て感情など

調査対象:0～5歳児をもつ母親(3,096 サンプル)

調査地域:首都圏:東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県

首都圏および東北以外の地域:北海道、愛知県、大阪府、兵庫県、福岡県

調査時期:2011年5月27日、28日

調査方法:インターネット調査

調査データを踏まえ、園の防災・危機管理について考える

## 園内、そして地域で連携し 防災に必要な「応用力」を高めましょう



今回の調査結果について、企業や自治体の防災・危機管理について研究や提言を行っているクライシスマネジメント協議会の長田逸平専務理事に、園に求められる防災・危機管理の考え方をうかがいました。

クライシスマネジメント協議会 専務理事

長田逸平

おさだ・いっぺい

日本経済団体連合会の地域政策グループ長などを経て現職。同協議会は、企業や団体と行政の連携によって、大規模・広域災害に対処する社会環境の整備に取り組んでいる。

### 防災は園だけでなく 地域全体で取り組むもの

地震や感染症の流行などの災害に対して、被害を小さくし、いち早く復旧するための社会環境を整えるのがクライシスマネジメントです。

地震のような大規模災害では、たまたま自園が被害をほとんど受けなかったとしても、近隣の園が大きな被害を受けることもあります。被災後は地域全体が協力して子どもたちの安全を確保していくことになりま

すから、平時から自園だけでなく地域やほかの園と連携して防災を考え

ていく視点が欠かせません。防災備蓄なども、自園だけで対策を進めるのは予算面などで難しいこともあるでしょう。そんなときは近

隣の園、小学校、福祉施設などと連携し、地域の声として行政などに投げかけていくことも園経営者の役割ではないでしょうか。いつも子どもと向き合い、子どものことを一番わ

### 災害に対応する現場力を語り合いの中で育む

避難訓練を行ったり、防災備品をそろえたりすることも、もちろん重要な防災活動です。しかし、気を付けていただきたいのは、それを型ど

りの取り組み、マニュアルづくりで終わらせないということです。災害は予想した通りに発生し、想定



### ポイント

- ◎地域と連携し、要望を大きな声としてまとめていく
- ◎保護者に対しても必要に応じて支援を要請する
- ◎職員間で語り合い、「想定外」に対応する現場力を高める

# 子どもの育ちを伝える 運動会の情報発信

～「結果」よりも「成長プロセス」に注目してもらうために～

運動会は、子どもの成長や園の教育・保育について保護者に伝えるよいチャンスです。

しかし、中には勝敗や出来不出来に強い関心をもつ保護者も少なくありません。

事前・事後の情報発信を工夫し、「運動会をどう見るとよいか」を伝えることで、園と保護者が子どもの育ちを共有し、信頼関係を深められるでしょう。

監修

ベネッセ次世代育成研究所  
顧問

磯部頼子



資料・事例提供 東京都練馬区立光が丘さくら幼稚園

◎教育目標は、「自分で考えて行動する子ども」「思いやりのある子ども」「明るく元気な子ども」。周辺には緑豊かな公園が多く、自然体験も充実している。

園長／瀬田雅江先生

所在地／〒179-0072 東京都練馬区光が丘2-4-8-101

園児数／66名（4～5歳児）※2年保育

## 練習のプロセスや子どもの変化を伝える

### 運動会は保護者や地域住民に園の方針を伝えるチャンス

子どもにとって晴れの舞台であり、年間行事の中で最も盛り上がる運動会。保護者や地域住民が集まるため、園の教育・保育について理解を深めてもらうチャンスでもあります。

「運動会の種目を通して心と体の成長が伝わるだけでなく、子どもの姿や保育者の声かけなどから、園の方針や保育の姿勢なども垣間見えます。運動会で受けた印象は園に対する信頼を左右し、園児募集など

の経営面にかかわることもあるでしょう」（磯部顧問）

運動会を通して保護者と良好な関係を築くためのポイントが「情報発信」です。どの園でも、事前に園だよりなどで運動会について伝えていますが、運動会のねらいがきちんと理解されているか、保護者が欲している情報を提供しているかといった視点から見直すと、改善点が見つかることもあります。

提供する情報により、保護者の運動会を見る視点は大きく変わります。例えば、運動会のねらいが十分に伝わっていないと、保護者は我が

子の「勝敗」にばかり関心が向くことがあります。もちろん、勝敗があることで、子どもは活動のめあてを意識しやすくなりますし、運動会が盛り上がる要素にもなります。しかし、子どもや保護者が過度に勝敗にこだわらないような配慮も必要でしょう。

「運動会をその後の成長につなげるには、勝敗にかかわらず、『自分の力を出せた』『みんなで協力できた』などと実感できるようにすることが重要です。そのためには練習のときから努力したり協力したりする姿を勝敗以上に大切にする必要

があります。こうした方針を保護者と共有しておくことで、勝敗だけに一喜一憂せず、我が子の成長に気がつきやすくなります」（磯部顧問）

保護者への情報発信について検討する際には、保育者自身が運動会の本来のねらいや意義を再確認する必要があります。

「その際、園長先生には、広い視点で運動会の意義をとらえ直し、保育者や保護者に伝えていく役割も求められます」（磯部顧問）

## 運動会前 当日までの努力や成長をていねいに伝える

### 発達段階も踏まえて見てほしいポイントを紹介

運動会前の情報提供の方法には、園だより、学年・クラスだよりや送迎時などのコミュニケーションがあります。内容には、次のような要素を含むようにします。

#### ●運動会そのものや種目のねらい

運動会は、楽しむだけのイベント

ではなく、保護者が子どもの成長を確認する場でもあることを説明しましょう。

「特に、集団の中での我が子の姿を見るよい機会であることを伝えましょう」（磯部顧問）

種目に関する説明では、各年齢の発達を意識します。かけっこなら次のような内容が考えられます。

【4歳】速く走るよりも腕を振って

走るなど、走りの基本を大切に【5歳】4歳のねらいに加え、1人の挑戦からチームでの挑戦になることにより、心と体の両方が育つことを大切に

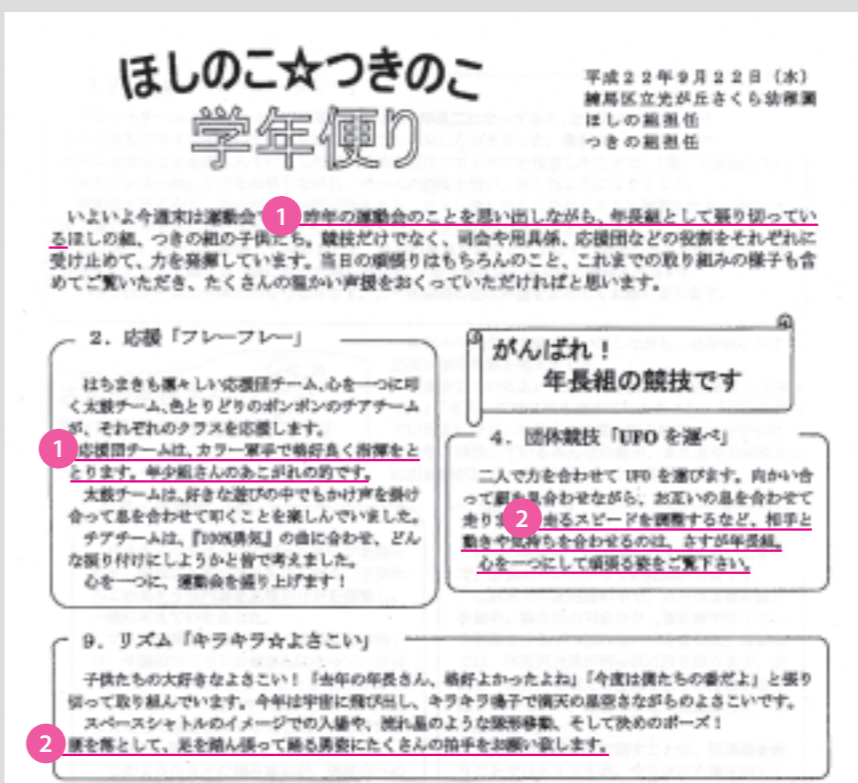
こうした発達段階を知ることで、保護者は我が子の成長を実感しやすくなります。

#### ●練習風景など当日までの様子

子どもが練習で努力し成長して

### 保護者に運動会の情報を伝える「学年だより」

#### 光が丘さくら幼稚園の例



◎東京都練馬区立光が丘さくら幼稚園では、2010年度の運動会の数日前、年長児の保護者に向けて、左のような学年だよりを発行しました。種目の紹介などと同時に、本番までのプロセスを伝えて子どもの育ちを共有することを特に重視したそうです。

#### ポイント 保育者の気持ち

1 「年長の姿を見て、年少が育ってほしい」という保育者の気持ちを、年長児たちも意識していることを伝えていきます。

#### ポイント 種目の見どころ、ポイント

2 年長が出場する種目の説明。内容やねらい、注意して見てほしいポイントなどを説明しています。

保護者に運動会の情報を伝える「学年だより」 光が丘さくら幼稚園の例

**ポイント 3** **準備を通して成長した様子**  
 みんなが注目する種目の一つであるリレーについての説明。子どもが他のチームに勝つためにアイデアを出し合ったり、話し合って順番を決めたり、本番までの準備を通して成長した様子が伝わってきます。

**ポイント 4** **係など競技以外の活動**  
 保護者の目が向きにくい係の活動を詳しく紹介して、運動会のさまざまな場面で育ちのきっかけになっていることを説明しています。

**12. リレー「スーパーリレー」**  
 ロケットチーム、EPOチームの2回戦を行います。年長組になってから、遊びの中で「リレーやりたい!」と自分たちでラインを引いて、繰り返し走ることを楽しんできました。最初は、エンドレスで走ることに、バトンを渡すことを楽しんでいましたが、夏休み明けにゼッケンを用意したことで、「僕、1番走る!」「私がアンカーね」などと相談しながら、チームの勝敗を懸け、楽しむようになりました。  
**3** 運動会が近くなり、学年対抗の対戦が始まると、バトン渡しのミスもなくそうと練習したり、「腕を大きく振ると早く走れる」などと互いにアドバイスしたりして取り組んできました。  
 走る時は、チームで相談して決めました。自分の意見を言うだけでなく、相手の考えを聞いたり、理由を伝えたりして話し合う姿に成長を感じました。(走る時はお子さんにご確認ください)  
 バトンはチームの仲間心を繋ぎます。力一杯頑張る姿に声援をよろしくお願ひ致します。

**4** 昨年の年長さんの姿を思い返しながら、運動会に向けて、必要な係の内容を考えました。  
 「司会をしていたよ」「これから運動会を始めますって言ったよ」「玉入れの時に玉を集めてくれたよね」「体操を踊っていたよ」など、年長さんの姿は魅力的だったんですね。今年、頑張っているみんなの姿が、また来年の年長さんに引き継がれていくことでしょうか。素敵ですね。

**さすが年長さん!**  
 様々な場面で力を発揮しています

**用具・体操係**  
**4** 年少さんのかけっこゴールテープを持ち、競技に必要な用具を出したり、子供たちにも出来るような内容を見極めながら提案し、一緒に考えていきました。  
 プールの準備体操で楽しんだ「宇宙体操」は、体操のお兄さんお姉さんになって、交替で前に立って体操をすることを楽しみました。また、日々の遊びや学級の活動の中でも、自分たちが必要物を準備したり片付けたりしながら、進めています。  
**5** このような日々の積み重ねが、運動会への取り組みの中でも発揮されていくことと想います。

**司会係**  
 昨年の運動会での年長組の役割を思い返す中で、多数の声があがっていたのが司会です。これまでの学年祭の中で、お弁当当番の挨拶を始め、誕生会の司会など、皆の前で話すという経験を少しずつ積み重ねてきました。運動会では、年長児全員が司会係に取り組みます。友達と一緒に声を揃えて言葉を言うのはなかなか難しいのですが、担当の友達と言葉を考え、取り組みます。  
 大勢のお客様の前で話すことは、緊張感を伴うことではありますが、やり遂げた満足度も大きいことと想います。どうぞ温かく見守って下さい。

**こんなことも!**  
**7** 大空はためく万国旗も子供たちが描きました。裏側からも見えるように練習時に絵の具で描いています。  
 「これ知ってる! フランスだよ」「この色が好きだな」など、国旗の絵本やカード、世界地図を見ながら、関心を覚めています。「おはげだね!」よりかたしと伝えます。

**ポイント 5** **日々の活動のかかわり**  
 運動会での活躍は、日常の活動に支えられていることへの理解を促しています。

**ポイント 6** **保育者が感じとった子どもの成長**  
 係の分担を決める話し合いで、お互いの思いを受け止めて気持ちを調整する育ちが見られたことを報告しています。

**ポイント 7** **集団生活の中での取り組みの意味**  
 一人ひとりの子どもが参加してつくり上げる運動会であることを強調して伝えています。

きた様子などを説明します。例えば、リレーの練習で次第にチーム意識が芽生え協力するようになった過程を説明すれば、保護者は勝敗より先に我が子の成長を喜ぶでしょう。さらに、子ども同士が話し合って順番を決めたり、他のチームに勝

つための作戦を立てたりする様子からも成長が伝わります。  
**●係など、全体の中での役割**  
 子どもが係を担う園ならば、自分が選んだ役割を果たすことにも意味があることを知ってもらいます。  
 「子どもは、集団の中で自分の役

割を自覚し、責任をもってやり遂げようとする過程で大きく成長していくものです。単に与えられた仕事を無事にこなせたかどうかだけではなく、子どもの内面の変化にも保護者の目が向くようにします」(磯部顧問)

**運動会後 当日の子どものがんばりや成長を個々の保護者に伝える**

**失敗した子どもの保護者には特に配慮する**

運動会後に抱えている気持ちは一人ひとりの子どもや保護者によって違います。そのため、運動会後に担任の保育者が送迎時などに個々の保護者に声をかける気配りが大切です。  
 「『転んでしまったけど泣かないでがんばれましたね』など、一人ひとりのがんばりや成長を見つけて

保護者に伝えるようにしましょう。できれば、運動会が終わって次に会ったときに話しかけたいところです。なかでも、何かに失敗した子どもの保護者は落ち込んでいることがあるので、特に気遣ってください」(磯部顧問)  
 また、運動会の運営などについて、保護者から要望が寄せられることもあります。  
 「改善に役立てられる意見は、『言ってくださってありがとうございます。来年に生かします』などと感謝の気持ちで接すれば、たいいての保護者は納得してくれると思います」(磯部顧問)  
 個々の保護者への声かけとともに、「この種目でこんな成長が感じられた」「運動会後の遊びがこう変わっている」など、全体的な成長や変化についても伝えたいものです。これは、園だよりなどで発信するとよいでしょう。

保護者に伝えるようにしましょう。できれば、運動会が終わって次に会ったときに話しかけたいところです。なかでも、何かに失敗した子どもの保護者は落ち込んでいることがあるので、特に気遣ってください」(磯部顧問)  
 また、運動会の運営などについて、保護者から要望が寄せられることもあります。  
 「改善に役立てられる意見は、『言ってくださってありがとうございます。来年に生かします』などと感謝の気持ちで接すれば、たいいての保護者は納得してくれると思います」(磯部顧問)  
 個々の保護者への声かけとともに、「この種目でこんな成長が感じられた」「運動会後の遊びがこう変わっている」など、全体的な成長や変化についても伝えたいものです。これは、園だよりなどで発信するとよいでしょう。

光が丘さくら幼稚園でのエピソード

**保育者の声かけで我が子の「成長」を感じとります**

◎Aちゃんはリレーで転んでしまいました。それを残念がっていたAちゃんの母親に、保育者はこんなお話をしました。  
 「リレーの練習で同じクラスのBくんはいつも泣いてしまい、最後まで走れませんでした。その姿を見た子どもたちの間に徐々に『みんなで走りたい』という気持ちが広がり、Bくんを仲間として勇気付ける温かい雰囲気が生まれました。  
 当日、Bくんはクラスみんなの応援を受けて何とか完走しましたが、他のクラスに大きくリードされてしまいました。次に走るAちゃんは、練習のときからB

くんをととも気遣っていました。隣の列の子にぶつかって転倒したのは、『Bくんの遅れを取り戻したい』と必死になるあまり、慌ててスタートラインに飛び出したからです。Aちゃんはすぐに立ち上がり、泣きながら走り抜いたんですよ。友だちの遅れをカバーするために必死で走る姿にととも感動しました。すごく成長したと思います」  
 当初は転んでしまったことばかりを残念がっていたAちゃんの母親でしたが、保育者の説明から我が子の成長を感じ取って安心したようでした。

**保護者から寄せられた声**  
 光が丘さくら幼稚園の例

運動会のねらいなどを十分に伝えることで、保護者からこのような感想が寄せられました

◎「走るとき前を見る」「転んでも泣かない」「自分の出番以外のときのあり方」などに子どもたちの成長が感じられました。  
 ◎今の年少さんも年長さんになったら、あんな風になるのかなと思うと、今から楽しみです。  
 ◎年長さんは自分の競技を行うだけではなく、運動会をつくっている感があり、子どもたちの成長を違う面から感じられました。  
 ◎年長のリレーはとともよいレースでした。皆で協力すること、一人ひとりがあきらめないで全力で走り、つなげていくことの素晴らしいところが、見ていた年少さんにも何となく伝わっているような気がします。

# 120%活用のヒント

その2

年3回お届けしている『これからの幼児教育』。園運営や保育の質の向上に少しでもお役立ていただければと願っております。そこで今回は、編集部より本号の活用のご提案と、全国の幼稚園・保育所の園長先生から寄せられた前号（特集：保護者への発信）の読者アンケートの声から一部をご紹介します。

## こんな使い方はいかがでしょうか？

園長先生が最後まで目を通して、全体を把握する

### 保育者への情報発信に活用

- 例えば、
- 保育者に回覧する。
  - 必要部分をコピーして、保育者に配布する。
  - 必要部分をコピーして配布し、職員会議や園内研修で話し合う。

**さらに!** 園長先生が、保育者に特に伝えたい点や考えてほしい箇所に線を引いたり、コメントを書き添えればより効果的!

### 保護者への情報発信に活用

- 例えば、
- 園だよりで紹介する。  
※出典をご記入ください。  
例) 出典:ベネッセ次世代育成研究所『これからの幼児教育 2011 秋号』
  - 必要部分をコピーして、保護者会で配布する。
  - 必要部分をコピーして配布し、保護者会で話し合う。

**さらに!** 園長先生が、保護者に伝えたい点や考えてほしい箇所にチェックを入れておけばより効果的!

※冊子はホームページからもダウンロードできます。また、追加発送も受け付けております（ただし、数に限りがあります）。詳しくは巻末をご覧ください。

## コーナーごとにこんな使い方もできます

### 第1特集

▶2ページ~

◎園長先生が園運営の参考資料として活用されるのはもちろんのこと、園内の保育者間で回覧したり、職員会議、さらに保護者会の資料としてお役立てください。特に重要部分にはアンダーラインを引いたり、イラストや図解で説明したりしています。その部分を重点的に共有すれば短い時間でも効果的に情報の共有や研修を行えます。

### データから見る幼児教育

▶12ページ~

◎まずは指導的な立場にある先生がご覧ください。また、他園の震災対策事例をもとに自園の対策を皆で考える園内研修の材料としてもお役立てください。

### 第2特集

▶16ページ~

◎運動会前の園だよりやクラスだよりの作成時に、記事の観点を盛り込んでいただくことや自園に合ったお便りの方法、さらに伝えたいポイントを考えることもよいでしょう。

## 全国の 園長先生から 寄せられたご感想

- 保護者への発信については、「自分たちはできている」と思っていたが、記事を読んで見直すきっかけとなった。(愛媛県 私立幼稚園)
- 「揺るぎない理念に基づく風通しのよい人間関係を」のことはひかれた。若手が育つ支援にもっと工夫と努力そして愛情が必要と思う。実践にうつしたい。(静岡県 公立幼稚園)
- 園内コミュニケーションが活性化するアイデアが非常に参考になり、早速とり入れたいと思うものがありました。(神奈川県 私立幼稚園)
- 日々の保護者とのかわり、懇談会、教育相談時などにこのような点を気をつけたいと思う内容が、たくさんありました。当たり前の事ですが、実際には、十分にできていないこともあり、職員全体で共通理解をもちたいと思います。(静岡県 公立幼稚園)

本誌は  
無料です

## ベネッセ次世代育成研究所の発刊物は、 ご希望に合わせて園へお届けします

※ただし、複数冊をご希望の場合は、岡山県からの宅配料がかかる場合がございますので、あらかじめご了承ください。

お手続き方法

ベネッセ次世代育成研究所ホームページ、もしくは、お電話でお申し込みください。通常はお手続き完了から**1週間~10日程度**でお届けします。

### ホームページ

インターネットで検索してください。▶▶▶    
<http://www.benesse.co.jp/jisedaikin/>

◎本誌はもちろん、乳幼児の子育てに関する調査や、幼稚園長・保育所長を対象とした調査の報告書など、ベネッセ次世代育成研究所の発刊物のお申し込みと閲覧（PDFファイルのダウンロード）が可能です。お急ぎの場合は、インターネットのご利用が便利です。



### お電話

**0120-933-964** 通話料無料

受付時間◎10:00~17:00(日曜・祝日は除く)

※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。  
※携帯電話・PHSからもご利用できます。  
※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は086-270-5037へおかけください(ただし通話料がかかります)。

お問い合わせの際、**必ず、下記の内容をお知らせいただきますよう** お願いいたします。

- ①お届け先の住所・ご所属・お名前
- ②お届け先の電話番号
- ③ご希望の冊子名(例:冊子名や発行年、月号をお知らせください)
- ④ご希望の冊数
- ⑤冊子を知ったきっかけ
- ⑥ご希望の理由(活用方法など)

**ご注意事項** ・お知らせいただいた内容に不備がある場合は、送付することができませんのでご了承ください。  
・在庫数には限りがあるため、送付を致しかねる場合、または、送付までにお時間をいただく場合があります。

## 発刊物のご紹介



### これからの幼児教育

2011年 夏号  
特集

思いを伝える情報発信で  
保護者と「つながる」  
園をつくる

A4判 24ページ

### ◎主な記事の内容

- 2011年春号 特集 **園の遊びがもたらす幼児期の学びの芽生え**
- 2010年秋号 特集 **特別なニーズをもつ子に寄り添う保育**
- 夏号 特集 **家庭と連携した食育活動のあり方\***
- 春号 特集 **保護者の成長を促す園の支援\***
- 2009年秋号 特集 **保育者の資質を高める園内研修**
- 夏号 特集 **幼保一体化と新しい幼児教育**
- 春号 特集 **幼小連携に向けて現場が取り組むべきこと**
- 2008年秋号 特集 **幼稚園教育要領改訂を日々の保育にどう生かす?**
- 夏号 特集 **幼稚園教育要領改訂のポイント**

※在庫切れのため、ホームページからダウンロードしてください。

### ◎その他、幼児教育・保育に関する発刊物



### 第1回 幼児教育・保育についての 基本調査報告書 (幼稚園編・保育所編)

◎全国の幼稚園・保育所を対象に、幼児教育・保育の実情と課題を調査から明らかにしました。

B5判 160ページ



### 幼児の遊びにみられる 学ばるの芽

◎4~5歳児の遊びの事例を59サンプル収集し、遊びに含まれる学びの可能性や保育者のかかわりを分析しました。

A4判 72ページ



### 保育所での 子どもの発達と 保育のポイント

◎0歳から就学前までの子どもの成長発達と保育者のかかわりや、幼児の言動の意味と援助のポイントをまとめました。

A4判 112ページ

※在庫数に限りがあるため、ご希望の冊数をお届けできない場合があります。ご了承ください。

### 編集後記

第1特集の中村先生のお話は、保護者のひとりとして思い当たる節があることばかりでした。4歳の息子は、園以外では思う存分外遊びをする機会も少ないし、ベッドで寝ているため、布団の上げ下ろしをあまり経験していません。早速今日から家の手伝いなどで生活経験を増やすことを意識しようと思います。(橋村)

### 「これからの幼児教育」2011秋号 2011年9月20日発行

発行人 新井 健一  
編集人 後藤 憲子  
発行所 (株)ベネッセコーポレーション  
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1  
新宿三井ビルディング  
企画・制作 ベネッセ次世代育成研究所  
印刷・製本 共立印刷株式会社

編集協力 (有)ベンダコ  
二宮 良太  
撮影協力 ヤマガチイック  
荒川 潤  
イラスト協力 アサマリカ

### 次号予告

2012 Spring 春

## これからの幼児教育

次号は**2012年1月下旬**発行(予定)  
年3回の発行(予定)です